

食料供給基地・熊本



▲ 西原公共育成牧場とスイカ畑

表1 農業要素全国比較

	本地面積	農業産出額	農家数	農家人口	専業農家	第2種兼業農家	農業従事者	基幹的農業者	左の
									うち
	ha	百万円	千戸	千人	千戸	千戸	千人	千人	千人
全九熊	5,391,000	5,035,787	5099.9	24,383.6	675.3	3,121.7	8,487	6,247	2,724
国本	140,000	157,550	853.1	684.4	169.0	459.0	1,405	1,091	467
熊本	2.6%	3.1%	2.8%	2.8%	5%	2%	3.2%	3.5%	3.7%

表2 主要作目の作付等の状況(47年)

	水稲	小麦	だいず	みかん	うち成園	くり	乳用牛	肉用牛	豚	採卵鶏	プロイ
											ラー
	ha	ha	ha	ha	ha	ha	頭	頭	頭	千羽	千羽
全九熊	2584,000	113,700	89,100	171,300	117,700	41,700	1,777,000	1,792,000	7,313,000	161,978	80,177
国本	65,600	10,800	1,930	13,100	7,250	3,630	44,900	96,300	223,000	2,770	1,353
熊本	2.5%	9.5%	2.2%	7.6%	6.2%	8.8%	2.5%	5.4%	30%	1.7%	1.7%

表3 農家1戸当たりの指標(47年)

	経営耕地面積	田	普通畑	桑園	果樹園	作付延面積	耕地利用率	自家農業投下労働日数	家族農業従事者数	左のうち専従者	経営耕地10アール当
											たり農業労働時間
	アール	アール	アール	アール	アール	アール	%	日	人	人	時間
全九熊	107.8	63.5	26.4	3.0	14.9	107.5	102.3	269.2	1.47	0.73	223
国本	88.4	50.2	21.1	2.3	14.8	94.3	119.0	280.1	1.52	0.83	286
熊本	103.9	56.6	27.3	4.5	15.5	111.4	121.4	367.9	1.92	1.22	304

表4 農畜産物の出荷量(47年)

品目	だいこん	はくさい	きゃべつ	なす	とまと	露地メロン	すいか	豚	成牛	肉用子牛	乳用肥
											育オス
	トン	トン	トン	トン	トン	トン	トン	頭	頭	頭	頭
全九熊	1,722,374	1,151,181	1,096,899	395,999	705,640	152,365	861,112	13,045,224	1,086,843	2,693	16,095
国本	32,436	38,104	27,445	8,224	26,659	30,379	101,486	238,813	13,378	990	1,565
熊本のシェア	1.9%	3.3%	2.5%	1.7%	3.8%	19.9%	11.8%	2.7%	3.6%	33%	9.7%

品目	肉用若鶏	成鶏
全九熊	382,807	60,885
国本	6,094	922
熊本のシェア	1.8%	1.5%

豊かな観光と土地に恵まれた私達の郷土は全国の中でも農業県として貴重な存在です。世界的な食料不足問題を引合いに出すまでもなく、食料の自給率を高めることが急務な日本にあって、供給県の地位は責任も大きいうえ、その内容についても今一度熟知するとともに吟味の必要があります。

今回は、供給県の特徴、畜産の振興、野菜の振興について特集しました。

熊本農業は果樹作、野菜作、畜産等各部門において輝かしい成果を収めつつあり、農業関係者は熊本農業の将来に明るい展望と自信を持つに至っております。

また、高度経済成長の影響は、全国の農業生産の地域分担に変化をもたらしつつありますが、熊本は温暖な気象条件に恵まれ、その上広大な未利用、低位利用の農業資源を豊かに持っており、既に開発された農用地を有効に利用するとともに、その充分な開発が図られるとき、将来にわたって、わが国の重要な食料供給基地として発展することが期待されます。

また、本県経済の振興を図るためにも、農業の開発、発展が果たす役割は極めて大きいものがあると考えられます。

しかしながら、熊本農業の現状を全体としてみるならば、一部の先進地域を除き、社会資本の相対的遅れ、大消費市場からの遠隔性等に加えて、いわゆる特殊土壌地帯の存在等のため、熊本農業はその有する資源を十分に活用するに至っていないと思われれます。

このような現状を克服し、熊本農業の

供給県としての特色

可能性を十分に發揮するとともに、熊本全体の均衡のとれた開発を行い農業経営の近代化、農業従事者の所得、生活水準の向上を図ることが必要です。

このため、各種の農業近代化構想をさらに掘り下げ、流通手段を中心とした農業関連社会資本整備の整備計画が一層促進され、農業に焦点を絞った包括的かつ具体的な「熊本県農業計画」が強力に推進されなければならないと思えます。

したがって、農業関係者はもとより広く各般の協力を得て「熊本県農業計画」に示された熊本農業の進むべき方向と到達目標とこれに必要な施策の完全な達成を図ることが、熊本農業に課せられた「食料供給基地」としての使命であると思えます。

熊本農業の位置づけ

（表1）近年、耕地面積、産出額の比重は、大都市近郊の耕地荒廃、農業的農地帯での農地開発等によって、熊本県を中心とする九州地方等に傾向的には拡大しつつあります。つまり、水田の拡張は九州で全国拡張面積の約二五%、畑では一五%と大きな比重を占めており、一方、かき鹿面積は水田で一五%、畑で一八%を占めているに過ぎません。このように拡張される面積が多い九州地方の中において、つづれる農用地は全国的には約五万七千haであるのに対し熊本では約千haの農用地が過去一ケ年間に減少したことになります。

このようなことから、主な作目の全国に対する割合は、水稲作付面積二・五%、みかん栽培面積七・六%、野菜ハウス面積では九州全体の五六%を占めており、とくに畜産なかでも肉用牛六%、乳用牛二・五%、豚三%と年々拡大傾向を示し、価格の上昇があったとしても畜産総合で熊本県総産出額の四十七年の二〇%の比重から四十七年には三三%と高まっています。また、野菜においても一一%から一四%へ県内の比重は高まっています。（表2）

農家の経営状態

また、最近における生産向上のテンポは、米の生産調整が始まった四十五年を一〇〇としてみてみますと全国では四十六年九五・七、四十七年一〇一・一、九州全体では、一〇一・一、一一〇・五に対し、熊本県では、一〇一・四、一一一・二と相当上回って伸びているのは心強いといえます。とくに、全国、九州平均の伸びを大中に上回っている部門は、米一〇六・二（全国九三・四 九州一〇二・一）、野菜一三〇（全国一〇七・二 九州一一三・七）、生乳一一九（全国一〇四・〇 九州一〇八・九）が目立っています。

しかし、農業の生産性は、まだ、かなり全国平均にくらべて劣っています。つまり、農家一戸当たり農業純生産額は、全国平均六十万五千二百円に対し六十三万三千円、経営耕地一〇アール当たり農業純生産は、五万六千円に対し六万九百円とそれぞれ上回っていますが、農業労働時間当たり農業純生産は二千五百円に対し二千三百円、農業固定資本千円当たり農業純生産は五百二十二円に対し四百五十二円とそれぞれ下回っています。

とくに資本整備のなかで農業機械の普及率は、全国平均を大中に上回りながら経営耕地一〇アール当たり農業労働時間が全国平均の二二三時間、九州平均二一八時間に対し、熊本は三三四時間と多いことは農業生産への意欲が大きいということが特徴として表われています。

つぎに、農家の経営状態をみてみますと、一戸当たり経営耕地面積は、全国の一〇七、八アールに対し一〇三・九アールと小さいけれども家族農業従事者数では一・四七人に対し一・九二人とくに専従者は〇・七三人に対し一・二二人と多